

# 反ファシズムの存立条件としてのファシズム

## —1960年ジェノヴァでの騒乱をめぐる—

秦泉寺 友紀

### 目次

- 1 はじめに——反ファシズムの困難
- 2 「イタリア社会運動」党大会をめぐる騒乱とその背景
- 3 ジェノヴァの騒乱をめぐる解釈
- 4 「イタリア社会運動」における「正常化」
- 5 「レジスタンスから生まれた共和国」という自画像の内的分裂
- 6 自画像の内的分裂の後退

今日わたしたちは（中略）きわめて深刻な推論が導きだされてしまうことを知っている。それは、ファシストの亡霊が戦場からひとたび退去させられたとしたら、反ファシズムという偶像にしがみつくなことがなんのためになるのか、ということになるからである。<sup>1</sup>

### 1 はじめに——反ファシズムの困難

冒頭に引用したのは、歴史家ルッツァット（Sergio Luzzatto, 1963-）による、著書『反ファシズムの危機』（2004年刊）での指摘である。東西冷戦の終結から派生して、国内的にも「第一共和制の終焉」（傍点部分筆者）」と認識されるような大幅な政治的変化を経ていた現代のイタリアで、ルッツァットが導き出さざるをえなか

ったのは、「反ファシズム」は「偶像」と化してしまうのではないかという「深刻な推論」であった<sup>2</sup>。その「推論」は、「反ファシズム」という立場が、実はその敵であるファシズムの存在をかえって前提にしてしまっているのではないかという懐疑によって呼び起こされていた。

ルッツァットのこの指摘は、「反ファシズム」が、ファシストという敵を欠く状態で、自らの立場を維持することの困難——別の箇所では、「リングにひとり残されたボクサー」にたとえられている——と、「反ファシズム」という否定形に立脚する立場それ自体が内在させている困難——否定する対象を、かえって自らの存立の前提として滑り込ませてしまう——の二重の意味を含んでいる<sup>3</sup>。こうした困難は、ファシズム支

<sup>2</sup> 「第一共和制の終焉」とは、具体的には、1994年の総選挙で、ベルルスコーニ（Silvio Berlusconi, 1936-）が党首を務める「フォルツァ・イタリア」を中軸とした右派連合が勝利し、戦後一貫して政権与党であった旧キリスト教民主党を中軸とした中道連合は、定数630議席のうち46議席にとどまった出来事をする。また、1990年代以降のイタリアでは、イタリアを代表するファシズム史家デ・フェリーチェ（Renzo De Felice, 1929-1996）ら複数の論者によって、「修正主義」と総称される見解が提起され、社会的な論争を巻き起こしていた。イタリアにおける「修正主義」とは、反ファシズムの「レジスタンスから生まれた共和国」という戦後イタリアの自画像について、「レジスタンス」におけるイタリア人同士の「兄弟殺し」という性格を隠蔽しているとするなど、それを批判的に捉える見解をさす。修正主義論争の展開に関しては、秦泉寺友紀「イタリア修正主義論争の構造——ネーションをめぐる相克」、『現代社会理論研究』第15号、2005年を参照のこと。

<sup>3</sup> ただし、ルッツァット自身は、同書の別の箇所でも、「反ファシズムが危機に陥った」ことの「要因」は、その「必然的な高齢化と、信用性の大きな毀損」にあるとしており、彼が指摘したこの論点は、彼自身によっては必ずしも十分に議論されていない。

<sup>1</sup> Luzzatto, Sergio, *La crisi dell'antifascismo*, Torino: Einaudi, 2004 (= 2006, 堤康徳訳『反ファシズムの危機——現代イタリアの修正主義』岩波書店), p. 21.

配の終焉から約 60 年が経過してはじめて生じたわけではない。それは究極的には、「レジスタンス」——イタリアのそれは、1943 年から 45 年にかけてのファシズムに抗した運動をさす——がファシズム勢力に勝利した——裏返せばファシズム勢力が敗北した——1945 年 4 月にまでさかのぼるものといえよう。

他方、戦後イタリアは「レジスタンスから生まれた共和国」を理念的自画像としてきた。歴史家のパヴォーネ (Claudio Pavone, 1920-) は、「レジスタンスから生まれた共和国」は、戦後イタリアの「公式の基本原則」であったと指摘している<sup>4</sup>。その自画像において、基本的な含意となっていたのは、「反ファシズム」の立場に立つということであった<sup>5</sup>。ルッツァットが示唆した先の困難に照らして考えると、「レジスタンスから生まれた共和国」という自画像の維持は、この困難な課題を克服できるかどうかにかかっていたともいえるだろう。

本稿は、「レジスタンスから生まれた共和国」というイタリアの自画像の困難な定着を、ルツ

ァットが示唆した「反ファシズム」が内包していた困難にさかのぼりながら、その安定と表裏一体の関係にあった不安定さを含めて描き出す試みである。具体的な手がかりとしては、1960 年 7 月に発生した「イタリア社会運動 (Movimento Sociale Italiano)」の、イタリアを代表する北部の港湾都市、ジェノヴァでの党大会開催をめぐる騒乱を取り上げる。簡潔に説明を補っておくと、「イタリア社会運動」とは、ナチスの支援のもと、ムッソリーニが建国を宣言 (1943 年 11 月) した「イタリア社会共和国」の士官経験者が中心となって、戦後、1946 年 12 月に結成されたネオファシスト政党である。主な支持基盤はローマ以南で、1948 年の選挙では 50 万票を獲得して下院議員 6 名と上院議員 1 名を誕生させ、1950 年代半ばには県庁所在地の約 3 分の 1 で地方政府の与党連合に加わるなど、一定の勢力を有していた<sup>6</sup>。

以下、2 節では、「イタリア社会運動」党大会をめぐるジェノヴァやその他の地域での騒乱がどのように展開したのかを、その政治的・社会的背景に照らしながら再構成する。次に 3 節では、この騒乱をめぐる一般的な解釈を、4 節で

い。なお「ボクサー」の比喩は、Luzzatto, *op. cit.*, p. 7.

<sup>4</sup> Pavone, Claudio, *Alle origini della Repubblica: Scritti su fascismo, antifascismo e continuità dello Stato*, Torino: Bollati Boringhieri, 1995, p. 188.

<sup>5</sup> 「レジスタンスから生まれた共和国」という自画像のうち、自らは「共和国」という理解は、直接には、戦後の政体として共和政と君主政のどちらを選択するかを問うた国民投票 (1946 年 6 月 2 日) の結果に依拠している。この国民投票——共和政支持が過半数を超えた——の直前に退位した国王ヴィットリオ・エマヌエーレ 3 世は、ムッソリーニに組閣を命じたことにはじまり、ファシスト体制の存続に大きく寄与しており、ファシズムのイメージが分かちがたく結びついていた。そのため、当時のイタリアの文脈では、国民投票で共和政支持が過半数を超えたことは、イタリアが反ファシズムであることの発露という意味をもっていた。

<sup>6</sup> Ferraresi, Franco, *Threats to Democracy*, Princeton: Princeton University Press, 1996 (=2003, 高橋進監訳『現代イタリアの極右勢力: 第二次世界大戦後のイタリアにおける急進右翼』大阪経済法科大学出版部), pp. 27, 29. なお、フェラレーニは、同党がローマ以南の地域で支持を集めた背景について、ローマでは「ブルーカラーが大して重要な存在でなく、またムッソリーニが公共部門の被雇用者を 20 年間抜く目なく大事にしたこと」、南部では「強力な左翼が一度も存在したことがないために、ファシズムはその最も残忍な顔を見せずに済んでいた」こと、「1943 年から 45 年にかけてのイタリア社会共和国、レジスタンス、そして内戦という決定的な体験が、南部には欠けていた」ことを指摘している。この点については、Ferraresi, *op. cit.*, pp. 27-28 を参照。

は、ジェノヴァでの党大会開催を決めた当時の「イタリア社会運動」内部の実情を検討する。さらに5節では「レジスタンスから生まれた共和国」という戦後イタリアの自画像が内的分裂に陥り、その求心力を弱めていたことをみていく。最後に6節で、1960年の騒乱が、結果としてそうした内的分裂を後景に退かせることで、「レジスタンスから生まれた共和国」という自画像の定着に寄与したことをみていく。

## 2 「イタリア社会運動」党大会をめぐる騒乱とその背景

1960年7月初旬、北部の都市ジェノヴァで騒乱が起こった直接のきっかけは、ファシスト党の流れをくむ「イタリア社会運動」党大会の、この地——「レジスタンス」経験を有する——での開催——より正確にいうと、7月2日から4日にかけて開催するとの決定——であった。この決定が、どの時点でジェノヴァで広く知られることとなったのかは定かではないが、党大会開催予定日前々日の6月30日には、市内中心部の複数の場所でこの決定に対する大規模な抗議行動が始まった。そして、この時同市で結成された「レジスタンス連合評議会」は、首相に対し、「イタリア社会運動」へのジェノヴァでの党大会開催許可の取り消しを求めた<sup>7</sup>。

イタリアを代表する全国紙『コリエレ・デッラ・セーラ』は、7月2日の紙面の第一面で、7

月1日にジェノヴァで行われた抗議デモに参加する人々の様子と、火炎瓶が投げられ炎に包まれるパトカーの写真を掲載し、この事件を「騒乱」という見出しで大々的に報じている<sup>8</sup>。同紙によれば、ジェノヴァでの抗議活動は数万人規模のもので、7月1日には、共産党・社会党系の労働組合である「イタリア労働総連合(CGIL)」の呼びかけでゼネストが行われ、市内中心部に位置するフェラーリ広場や、「イタリア社会運動」支部近辺など各所でデモ隊と警察が衝突した。この衝突は、病院に搬送された重軽傷者27名のほか、多数の負傷者を出した。こうした状況を受け、7月1日の夜半には、大会会場として予定されていた劇場の支配人が会場の貸し出しを取りやめることを発表、ジェノヴァ市当局は「イタリア社会運動」に別の会場での開催という代替案を提案したものの、同党はこれを拒否し、党大会の中止を発表した<sup>9</sup>。

党大会の中止によって、「イタリア社会運動」の党大会開催への抗議として始まったジェノヴァでの騒乱は一気に沈静化に向かった。しかし、抗議の動きはジェノヴァではおさまらず、またたく間に全国各地に飛び火した。当時のキリスト教民主党のタンブローニ(Fernando Tambroni, 1901-1963)政権は、警察に発砲許可を出すなど、デモに対し強硬姿勢を取り続け、7月5日には

<sup>8</sup> *Il corriere della sera*, 2 luglio 1960.

<sup>9</sup> *Il corriere della sera*, 2 luglio 1960. ただし、混乱のなかで決まった大会中止のいきさつをめぐっては、ジェノヴァ市長が、公共の秩序を保つためにという観点から中止を命じたとの説もある。こうした説は、Ignazi, Piero, *Postfascisti?: Dal Movimento sociale italiano ad Alleanza nazionale*, Bologna: Il Mulino, 1994, p. 28.

<sup>7</sup> Del Boca, Angelo & Giovana, Mario, *Fascism Today: A World Survey*, London: Heinemann, 1970, p. 154.

南部のシチリア島の都市リカータでデモ参加者1名が、7月7日には中部の都市レッジョ・エミリアでさらに5名が警官に射殺される事態にまで発展した<sup>10</sup>。

共産党の市長らが登壇し、「イタリア社会運動」への抗議集会として開かれたレッジョ・エミリアでの集会は、5000～7000人の参加者の周囲を警察が取り囲むという物々しい雰囲気のもと行われた。この集会で発生した参加者と警察の衝突は、「本物の戦場」にたとえられる激しいものだった<sup>11</sup>。警察による発砲で5名もの死者を出したこの事件によって求心力を大幅に低下させたタンブローニ政権は、発足から4ヶ月足らずの7月19日、総辞職に追い込まれた<sup>12</sup>。

こうした一連の出来事で何より目をひくのは、当時の人々において、「イタリア社会運動」への抗議と「レジスタンス」の顕彰が、あたかもひと組を成すような緊密に結びついたものとして、認識されていたことである。ジェノヴァ市内の「レジスタンス」記念碑は、「イタリア社会運動」の党大会の中止が発表されると、洪水のようなおびただしい量の花束で覆われたという<sup>13</sup>。また、レッジョ・エミリアで抗議集会が開かれたのも、「レジスタンス」記念碑が設置された広場であった。これらの現象、出来事は、当時の社

会において、「イタリア社会運動」に対する抗議を「レジスタンス」の顕彰と表裏一体のものと捉える認識が存在していたことを示すものといえよう。

当時のイタリアでは、キリスト教民主党が一貫して政権与党であったが、同党の1941年の結成以来のリーダー、デ・ガスperi (Alcide De Gasperi, 1881-1954)の没後は短命の政権が続き、7年間に7度という目まぐるしさで内閣が交代していた。タンブローニ政権は、その年の3月に発足したばかりで、「イタリア社会運動」と、君主制への復帰を掲げる「国民君主党 (Partito Nazionale Monarchico)」の信任でかろうじて院内多数を確保するという状況にあった。閣外協力の立場とはいえ、ファシスト党の流れをくむ「イタリア社会運動」が、政権発足のカギとなったのは、戦後はじめての事態だった。

### 3 ジェノヴァの騒乱をめぐる解釈

以上のように展開したジェノヴァでの騒乱は、一般적으로およそ次のように理解されてきた。すなわち、「イタリア社会運動」がこの地での党大会開催を企画したのは、同党が（閣外協力とはいえ）政権発足に貢献したという、同党にとって晴れがましい出来事に勢いづいてのことだった。しかし、「レジスタンスから生まれた共和国」を自画像とする——すなわち「反ファシズム」を理念とする——戦後のイタリアでは、こうした動きは容認し難く、これに対して巻き起こ

<sup>10</sup> Ginsborg, Paul, *A History of Contemporary Italy: Society and Politics 1943-1980*, London: Penguin Books, 1990, p. 348.

<sup>11</sup> *Il corriere della sera*, 8 luglio 1960.

<sup>12</sup> 新首相に就任したのはキリスト教民主党のファンファニーニ (Aminatore Fanfani, 1908-1999)であった。ファンファニーニは、1958年から59年、60年から62年、62年から63年、82年から83年、87年の5回にわたって首相を務めた。

<sup>13</sup> Ginsborg, *op. cit.*, pp. 347-348.

た激しい反発によって、党大会は中止に追い込まれたといった解釈がそれである。

この騒乱を「反ファシズム」のあらわれと捉える解釈は、騒乱と同時代に限らず——先に触れた、党大会の中止を受け、ジェノヴァの「レジスタンス」記念碑が大量の花束で覆われたことは、そのあらわれといえよう——、現在も一般的である。戦後の通史としてイタリアでも評価の高い『現代イタリア史 1943-1980』での歴史家ギンズバーグ (Paul Ginsborg, 1945-) の解釈も、それに即している。彼は、ジェノヴァで党大会を開催するとの「イタリア社会運動」の決定に対する「ジェノヴァ市民の暴動的な反応」は、「反ファシズムが、とりわけ北・中部のイタリアにおいて、支配的なイデオロギーの一部となっていた」ことを明白に示すものと総括した<sup>14</sup>。つまりギンズバーグは、ジェノヴァでの騒乱について、その段階で既にイタリアに根をおろしていた「反ファシズム」という「イデオロギー」が、それを引き起こしたと解釈している。

政治学者イニャーツィ (Piero Ignazi) の見解も、ギンズバーグと同様、ジェノヴァでの騒乱を「反ファシズム」によって導き出された現象と捉えている。彼は、「イタリア社会運動」の歴史的展開を跡づけた著書、『ポストファシスト? ——イタリア社会運動から国民同盟へ』で、タンブローニ政権の『「聖職者—ファシスト」の政

府の構図は、ジェノヴァを震源地とする一連の抗議デモの導火線をつけた」、「大会に対する左派の反発は、イタリア社会運動の若者によるいくつかの野蛮な振る舞いと、大会が、ジェノヴァが (筆者注: 1940 年代の) ドイツ支配下にあったときの市長、バジーレ (Carlo Emanuele Basile, 1885-1972) が議長となつて行われるとの声明による」ものだったとした<sup>15</sup>。さらに彼は、こうした抗議の「真の動機」となっていたのは、「イタリア社会運動がタンブローニ政権の支え」であったことだと論じた<sup>16</sup>。

むしろ、「イタリア社会運動」の党大会の開催のみが、ジェノヴァでの騒乱に加わった人々の不満の対象であった、あるいはそうした人々が反ファシズムという価値のみに突き動かされて行動していたという状況は考えにくい。たとえば経済的背景をみると、当時のイタリアは、1950 年代後半から約 10 年続いた「奇跡」の経済成長の只中にあったが、その成長は安価な労働力に支えられており、実質賃金は、1953 年を 100 とすると 1960 年には 99.4 とむしろ低下していた<sup>17</sup>。「奇跡」は「進歩した技術をもち、生産性の高い大企業」と「労働力を吸収する生産性の低い伝統的諸分野」の二極化をもたらし、「社会的緊張

<sup>15</sup> Ignazi, *op. cit.*, p. 28.

<sup>16</sup> Ignazi, *op. cit.*, p. 28.

<sup>17</sup> 「300 万人の働き手を吸収する安全弁」と呼ばれた国内の南部から北部への移民労働者は、低賃金労働力の主たる源泉となっていた。なお、1958 年から 63 年にかけての GDP 成長率は、年平均 6.3 パーセントという高さで、1963 年の失業率は過去最低の 3.6 パーセントを記録している。以上については、Ginsborg, *op. cit.*, pp. 287-288 を参照。

<sup>14</sup> Ginsborg, *op. cit.*, pp. 256-257.

を悪化」させていたとも指摘される<sup>18</sup>。ジェノヴァでの騒乱が、こうした「社会的緊張」のはけ口としての性格を帯びていたとしても不思議はないだろう。

ただし、ここで注意しなければならないのは、「奇跡」がもたらした「二極化」は、たとえ「社会的緊張」を高めていたとしても、このような激しい抗議にさらされてはいなかったことである。それに対し、「イタリア社会運動」の党大会のジェノヴァでの開催は、「騒乱」を引き起こした。このことから、ファシズム（とおぼしき勢力）の伸長が、（程度の差はあれ）異議申し立てに値するという認識が——実際の行動は必ずしも「反ファシズム」に還元されない動機づけによっていたとしても——、当時のイタリアに一定の広がりで存在していたことがみてとれる。その点において、ジェノヴァでの騒乱は戦後イタリアで「反ファシズム」が「支配的なイデオロギーの一部となっていた」ことを示すというギンズバーグの解釈は、少なくとも一定程度は妥当なものといえる。

しかしながら、ギンズバーグらの解釈は、2つの問題を抱えている。第一に、その見解は「イタリア社会運動」がジェノヴァを党大会の開催地に選んだことの意味を、同党の意図にさかのぼって捉え返すような視点からは検討していな

いことである。この点にとくに触れていないイニャーツィに対し、ギンズバーグは、「タンブローニ政権がイタリア社会運動の信任票に依存していたことが、同党の警戒心を弱めていた」ことを、その選択の背景として指摘している。だが、ギンズバーグも別の箇所述べているとおり、ジェノヴァは「レジスタンス」を象徴する都市であり、同党がそこで党大会を開催すれば、波紋を呼ぶことは想像に難くない。そのため、単に「警戒心を弱めていた」というだけで、同党がこの地を開催地に選んだという説明は、いささか説得力に欠ける。南部を主たる支持基盤とする同党が、なぜあえてジェノヴァを開催地に選んだのかを内在的に理解することは、この騒乱の意味を捉えるうえで不可欠と思われる。

第二に、より重要なこととして、ギンズバーグの見解は、ジェノヴァでの騒乱を、「反ファシズム」という「イデオロギー」が「支配的なものとなっていたことの証左としてのみ捉えており、「反ファシズム」がこの騒乱を契機として噴出した、まさにそのことを通して、自らの存立を確かなものとし得たという側面をみていないということがある。このことは、「レジスタンスから生まれた共和国」という戦後イタリアの自画像が抱えてきた、ある構造的な困難の見落としにもつながっている。それは、「反ファシズム」が「反ファシズム」という否定形によって語られてきたことにその一端が示されるように、否定すべき敵がかえって前提とされていたこと、

<sup>18</sup> Lumley, Robert, *States of Emergency: Cultures of Revolt in Italy from 1968 to 1978*, London: Verso, 1990, p. 14. Procacci, Giuliano, *Histoire des Italiens*, Paris: Librairie Arthème Fayard, 1970 (=1984, 豊下梢彦訳『イタリア人民の歴史Ⅲ』未来社), p. 321.

またその内容を肯定形の積極的なものとしては満たしきれなかったことに伴う困難である。このことによって、「反ファシズム」は、ある種の不安定さはらむこととなった。以下、4節では前者について、5節、6節では後者について検討していきたい。

#### 4 「イタリア社会運動」における「正常化」

1946年12月に結成された「イタリア社会運動」は、当初、「イタリア社会共和国」が創設憲章とした「ヴェローナ憲章」をそのまま綱領としていたことにみられるように、ファシズムとの連続性を明白に有していた。また、グラツィアーニ（Rodolfo Graziani, 1882-1955）ら、戦後のイタリアで「イタリア社会共和国」の正当性を主張した人々は、「イタリア社会運動」やその周辺で活動しており、同党をファシズムの継承政党と捉える理解は、それなりの根拠をともなっていた<sup>19</sup>。

しかし、党内に深刻な不一致と対立を抱えていた「イタリア社会運動」の性格は、一概にファシズム政党とは言い切れないものへと変化しつつあった。イタリアの極右研究の第一人者でトリノ大学社会学部の正教授であったフェラレ

ージ（Franco Ferraresi, 1940-1998）によれば、結成当初、党内で主導権を握っていたのは、「イタリア社会共和国」の士官出身者を中心とし、ファシズムの復興を掲げていた「革命派」と呼ばれるグループであった。しかし、1950年代初め、党内での激しい主導権争いを経て、「革命派」とは一線を画した「穏健派」と呼ばれるグループが主導権を握るなかで、「イタリア社会運動」の性格は大きく転換していった<sup>20</sup>。

同じくフェラレージによれば、ミケリーニ（Arturo Michelini, 1909-1969）を中心とする「穏健派」の新指導部は、「レジスタンス」闘争の経験をもたず、中南部の有権者を基盤とし、地元名士としての社会的地位を有する人々であった。こうした人々からなる「穏健派」は、「政府寄りの措置を数多く採用」という自分たちの方向性を、党の「正常化」と呼んでいた。タンブローニ内閣以前にも、「穏健派」が主導権を握って以降の同党は——いずれの政権についても、その発足のカギとはなったわけではないが——、1957年にはゾーリ（Adone Zoli, 1887-1960）内閣、1959年にはセーニ（Antonio Segni, 1891-1972）内閣に信任票を投じた<sup>21</sup>。また、1955

<sup>19</sup> グラツィアーニは、ファシスト体制下でリビア総督、「イタリア社会共和国」で国防相を務めた人物で、戦後、ナチスとの協力により懲役19年の判決を受けたが数ヶ月で特赦され、1950年に「イタリア社会運動」に加入、同党の初期の中心的人物のひとりとなっていた。彼は著書『イタリアのための道——私は祖国を守った』（Graziani, Rodolfo, *Una vita per l'Italia: Ho difeso la patria*, Milano: Mursia, [1948]1994）で、ソ連こそが「祖国」イタリアの敵であり、その脅威からイタリアを防衛したのが「イタリア社会共和国」であったといった議論を展開した。

<sup>20</sup> 「正常化」に対する「非妥協」的な人々の反発は大きく、1953年には93の県連組織のうち45ヶ所で急進派支持を理由に書記が解任され、これらの組織がローマからの代表委員によって運営される「代表直轄」の下に置かれるという状況にあった。「穏健派」に反対した人々の中心人物は、1947年から1950年、1969年から1987年までの2度にわたり書記長を務め、ファシズム下で反ユダヤ人キャンペーンを推進したアルミランテ（Giorgio Almirante, 1914-1988）であった。Ferraresi, *op. cit.*, pp. 29-31.

<sup>21</sup> ゾーリ内閣（1957年5月～58年6月）、セーニ内閣（1959年2月～60年2月）は「イタリア社会運動」のほか、それぞれいづれも君主制の復活を掲げる「人民民主党（Partito popolare

年の大統領選挙では、キリスト教民主党のグロンキ（Giovanni Gronchi, 1887-1978）を支持し、その当選に寄与してもいた。イニャーツィは、タンブローニ政権の発足は、ミケリーニのこうした計画が「実現の入り口にたどり着いた」出来事であったと指摘している<sup>22</sup>。

そもそもジェノヴァでの騒乱に関しては、先にも触れたとおり、「イタリア社会運動」がなぜこの地を党大会の開催地に選んだのかという疑問の余地が残されていた。ギンズバーグはこの点に関し、タンブローニ政権発足のいきさつが「同党の警戒心を弱めていた」ことを指摘していた。だが、ネオファシスト政党とみなされていた同党がそこで党大会を開催すれば、波紋を呼ぶことは容易に予想がつく<sup>23</sup>。また、当時の党指導部は、ファシスト色の払拭をはかっていた「穏健派」であり、この問題にはとりわけ敏感であったとも考えられる。むしろ、党内の「革命派」の存在を考慮すれば、同党が「警戒心を弱めていた」ためにこの地を開催地に選んだという説明は、全く説得力を欠くというわけではない。しかしそれは、部分的な説明にとどまっていると考えられる。

この点について、フェラレージと歴史家でジャーナリストのデル・ボーカ（Angelo Del Boca, 1925-）は、注目すべき指摘を行っている。フェ

ラレージの指摘は、ジェノヴァでの党大会開催は実は「イタリア社会運動」の「穏健派」の意図としては、自らの政党の「完全な政治的地位」への参入を祝うことにあったというものである<sup>24</sup>。デル・ボーカもまた、この党大会は「タンブローニ政権によってイタリアに据え付けられた、‘合法性’や‘民主的精神’の型に、イタリア社会運動が完全に忠実であることを強調することを意図」していたと述べ、フェラレージと同様の見解に立っている<sup>25</sup>。デル・ボーカは、騒乱当時の同党幹部で「イタリア社会共和国」のベルリン駐在大使であったアンフーゾ（Filippo Anfuso, 1901-1963）の発言を引用している。

ジェノヴァで大会を開かせてもらえたなら、我々は綱領を明確にして民主的信念を明らかにし、これらのことを確約していただろう。それだけではない。キリスト教民主党が我々の意図を理解しようと努めて我々を政府に加えていれば、我々の党は消滅してさえたかもしれないのだ。そうする代わりに、彼らは我々を船の外へ放り出した<sup>26</sup>。

<sup>24</sup> Ferraresi, *op. cit.*, p. 32.

<sup>25</sup> Del Boca & Giovana, *op. cit.*, p. 155. なお、デル・ボーカは、彼という「懐旧派」（フェラレージの「革命派」に相当する）については、政権への閣外協力という「慣れない成功によって大胆になっていた」とし、「労働者の扇動に対処するのに‘力’の政策’をとり、‘秩序の回復’をすべきだと政府に要求していた」と指摘している。Del Boca & Giovana, *op. cit.*, p. 154.

<sup>26</sup> Del Boca, *op. cit.*, p. 155.

italiano)」、「イタリア自由党（Partito liberale italiano）」の閣外協力を受けていた。

<sup>22</sup> Ignazi, *op. cit.*, p. 28.

<sup>23</sup> デル・ボーカも「挑発的な性格」は「明白であった」と指摘している。この点については、Del Boca & Giovana, *op. cit.*, p. 154.



このアンブローソの発言は、騒乱から2年あまり後の、1962年10月に行われたデル・ボーカによるインタビューの際のものである。その点で、それは、後付け的な要素が一切含まれないとは言いきれない。しかし、「正常化」路線が約10年にわたって続いていた当時の状況を考えれば、当時の「イタリア社会運動」の指導部が、自らの党について、ファシスト政党という性格を脱したと認識していたとしても、不自然ではない。そうであるとすれば、「穏健派」の党指導部は、「反ファシズム」という戦後イタリア社会の基底的価値に挑戦するためでなく、むしろ自らの「民主的信念」を対外的に示すための機会として党大会を捉えており、だからこそ「レジスタンス」の本拠地のひとつであるジェノヴァを開催地に選んだという構図が浮かび上がる。

さまざまな軋轢を伴いながらも、「イタリア社会運動」がファシズムから距離をおく方向に向かっていたことは、ネオファシスト政党とみなされてきた同党ですら、戦後のイタリアで大衆政党であろうとする限り、ファシズムを標榜し続けることが現実的な選択肢でなくなっていたことを示唆する<sup>27</sup>。実際、ジェノヴァでの党大会に関し、激しい反発に遭遇した際も、同党が党機関紙で対外的に訴えたのは、ファシズムの真正さなどではなく、「(党大会中止という)敗北は、民主主義的共和国にとって非常にいたましい」ことであり、その「敗北」は「憲法や自

由や民主主義の敗北に広がる」恐れがあるという懸念だった<sup>28</sup>。このような「イタリア社会運動」の対応は、「反ファシズム」の規範的価値としての影響力が、同党の姿勢にまで波及するものとなっていたことを示す。

しかし、当時の社会的、政治的情勢において、「イタリア社会運動」がその性格を変えつつあったこと——ファシスト政党としての性格を弱めつつあった——と「反ファシズム」の勝利は、冒頭で引用したルッツァットの「深刻な推論」——ファシズムという敵の不在は、「反ファシズム」の存在する意味を掘り崩すのではないか——を浮上させる。そして、こうした「イタリア社会運動」の変容は、ジェノヴァでの騒乱を、反ファシズムの定着／未定着という対立図式において捉えようとするまなざし、さらにはファシズムと反ファシズムを、完全に断絶した対立項と捉えるまなざし——それは、この騒乱に限らず、ファシズムと反ファシズムについて考える際の前提となるものである——にも疑問符を突きつけ、見直しを迫るものといえる。先に触れた、ギンズバーグの解釈の第二の(より重要な)問題点は、その点に関わっている。

## 5 「レジスタンスから生まれた共和国」という自画像の内的分裂

ギンズバーグの解釈の第二の問題点は、ジェノヴァでの騒乱が、「反ファシズム」の存立を確

<sup>27</sup> 「イタリア社会運動」党内の軋轢については、注20を参照。

<sup>28</sup> *Il Secolo d'Italia*, 3 luglio 1960.

たるものとする契機となった側面をみていないことだと先に述べた。ここでは、その点について検討するために、「ナチファシスト」からの解放をめざした闘争であり、イタリアの戦後を決定的に方向づけることとなった「レジスタンス」における諸派の協力関係がたどった展開を追う。具体的には、戦後のイタリアで「レジスタンスから生まれた共和国」という自画像が、内分的分裂に陥っていたことをみていきたい。

「レジスタンス」を率いたのは、共産党やキリスト教民主党をはじめとする旧政党勢力を糾合して1943年9月に結成された「国民解放委員会（Comitato di Liberazione Nazionale）」であった。ムッソリーニは当時すでに失脚していたが、その後のバドリヨ（Pietro Badoglio, 1871-1956）政権が連合軍と休戦協定を結んだことが明るみにでると、もとの同盟国であったドイツが駐留軍を大幅に増強し、北部を中心とする地域が、同軍の事実上の支配下におかれていた。「国民解放委員会」は、こうした状況下で、「ナチファシスト」からの解放を掲げて結成され、1944年6月には、社会党出身の委員長、ボノーミ（Ivanoe Bonomi, 1873-1952）が、バドリヨに代わる首相となり、ファシストとの断絶が明示的に示された。さらに北部で続いていた戦闘も、1945年4月には「レジスタンス」勢力の勝利で幕を下ろした。

もともと異なった主張を掲げる諸政党の集合体であった「国民解放委員会」は、決して一枚

岩の組織ではなかったものの、ファシズムという共通の敵をまえに、紆余曲折を経ながらも足並みをそろえていた。しかしその団結は、敵であるファシズムに勝利した「解放」後、程なくしてほころびを見せ始め、1947年5月に成立した第4次デ・ガスperi内閣は、共産党と社会党を閣外に押し出した中道連合として発足し、左右の対立構図は、以後恒常化した。東西冷戦が深まるなかで、イタリアが西側陣営に組み込まれたことは、こうした展開の大きな要因として指摘される。

1948年4月の選挙に向けて行われた選挙戦は、「国民解放委員会」を構成した諸政党間の協調が、もはや過去のものとなっていたことを如実に物語る。この選挙——キリスト教民主党が48.5パーセントの票を獲得した——で、共産党と社会党からなる「民主人民戦線」とキリスト教民主党とは、激しい相互批判を繰り広げた。キリスト教民主党の指導者デ・ガスperiが、アメリカ国旗の図柄のヘルメットをかぶったサルのように描かれ、「トルーマンの狙撃兵」、「戦争の扇動者、売国奴に反対」と書かれた「民主人民戦線」のポスター、馬に乗ってサーベルを抜いたガリバルディ（Giuseppe Garibaldi, 1807-1882）——イタリア統一時の英雄で、「民主人民戦線」のシンボルとなっていた——が、おびえた様子の共産党の指導者トリアッティ（Palmiro Togliatti, 1893-1964）に対し、「イタリアから出て行け」、「出て行け外国人」と唱えている図柄のキリスト

教民主党のポスターは、両者の批判の容赦のなさを示している<sup>29</sup>。総選挙後に起こったトリアッティの暗殺未遂事件も、両者の溝をいっそう深めた。

ファシズムに対する勝利は、「国民解放委員会」を構成した諸政党の共通の目標であり、その達成は誇るべき輝かしい出来事と認識されていた。こうした認識なしには、「レジスタンスから生まれた共和国」が、戦後イタリアの理念的自画像となることはなかったであろう。戦後のイタリアでは、1945年4月に北部の主要都市での一斉蜂起が成功のうちに終わったことを記念し、4月25日は、「解放記念日」として祝日に指定されている。だが、ファシズムに対する勝利が同時に意味していたのは、「国民解放委員会」の諸政党を結びつけてきた共通の敵の消滅であった。このことによって、戦後のイタリアでは、倒すべき敵を目のまえにした段階では先送りされ、水面下に隠れていた諸政党のさまざまな差異や対立が表面化し、今度はそれぞれが主たる政治的争点として争われるという新たな状況が生じた。裏返せば、その勝利によって、「反ファシズム」という共通項の意味は、相対的に低下せざるを得なかった。

ジェノヴァでの騒乱が発生する4ヶ月前、タンブローニ政権発足時の『コリエレ・デッラ・セーラ』紙の紙面は、ファシストという敵が完

全に後景に退いていたことを端的に示す。タンブローニ政権の発足時、同紙が社説で不安定要因として指摘していたのは、同政権が「イタリア社会運動」の閣外協力によって支えられていたことではなく——この点については言及すらされていない——、そのキリスト教民主党内での支持基盤の脆弱さであった。この意外ともみえる『コリエレ・デッラ・セーラ』紙の姿勢は、当時の政治的な関心がキリスト教民主党内の対立に集中し——もともと対立を抱えていた同党内の求心力は、デ・ガスペリの死去（1954年）によってさらに低下していた——、ファシストが戦うべき敵としての意味を喪失していたことを示すものといえる。

「レジスタンス」の勝利を記念する「解放記念日」も、解放の翌年の1946年こそ、「国民解放委員会」を構成した諸政党が一同に会し、デ・ガスペリが祝辞を述べる記念式典が開かれたものの、そういった統一的な式典は、以後（当時の）チャンピ（Carlo Azeglio Ciampi, 1920-）大統領が大統領府主催での記念式典を開催するようになる2003年まで、行われなかった。他方、6月2日の「共和国記念日」——政体を決定する国民投票が1946年に実施された日に由来する——は、大統領府主催の式典やパレードで盛大に祝われる。「共和国記念日」との比較において浮かび上がる、「解放記念日」の顕彰のされ難さは、戦後イタリアが「レジスタンスから生まれた共和国」を自画像としながらも、その「レジ

<sup>29</sup> Ventrone, Angelo, *Il nemico interno: Immagini e simboli della lotta politica nell'Italia del '900*, Roma: Donzelli, 2005, p. 181, 201.

スタンス」に関する理解が集約され難くなっていったことの一端を示唆する。

ジェノヴァでの騒乱は、以上みてきたような、「レジスタンスから生まれた共和国」という自画像が——それが自画像であることに変わらないにせよ——内的な分裂に陥っていた状況で発生した。このことは、ジェノヴァでの騒乱を理解するうえで重要な意味をもつと考えられる。というのも、それは先のギンズバーグの解釈と今ひとつかみあわないからである。3節でみたように、ギンズバーグは、ジェノヴァでの騒乱を「反ファシズム」という「イデオロギー」が既に「支配的な」ものとなっていたことの証左と捉えていた。そうした解釈は——ギンズバーグ自身が明確に述べているわけではないが——、「反ファシズム」が確固たる結集軸として定着していたとの理解を前提としているように思われる。だが、ここでみてきたような状況は、ファシズムの存在感の低下——それは「反ファシズム」の勝利によってもたらされ、その勝利は「反ファシズム」にとって顕彰すべき輝かしい出来事でもあった——を前に、それを否定することで結びついていた「反ファシズム」の結集力が低下し、さらにはその規範的価値としての効力が揺らいでいたことを示す。

## 6 自画像の内的分裂の後退

ジェノヴァで発生した騒乱は、1960年当時のイタリアで大きな反響を巻き起こした。下院の

議場でのナッタ議員（Alessandro Natta, 1918-2001）の発言と、それに対する議場の下院議員の反応は、この出来事に関する当時のイタリア社会の理解のあり方を端的に示している。有力な共産党議員で、自身も「レジスタンス」に加わった経験をもつナッタは、下院で「イタリア社会運動」の党大会開催は「レジスタンスの金メダルの都市」であるジェノヴァに対する「冒涇」であり、ジェノヴァで起こっている抗議は「民衆的、統一的性格のあらわれ」だと述べた。そしてこの発言は、「全ての議員の『レジスタンス万歳』という叫びと拍手喝采を引き起こした」<sup>30</sup>。

ジェノヴァはじめ全国各地での「数週間にわたる激烈な社会的紛争」は、戦後から当時までのイタリア社会で最大のものであった<sup>31</sup>。ナッタの発言と、それに対する反応からは、「イタリア社会運動」がファシズムに連なる勢力と捉えられていたこと、またジェノヴァで生じた異議申し立ては、党派的なものではなく、「民衆的、統一的」な広がりをもつと考えられていたこと、さらにそのような異議申し立ては、「レジスタンス」を継承する「反ファシズム」のあらわれと解釈されていたことが見て取れる。さらに、ナッタの発言が喚起した、満場一致の「叫びと拍手喝采」を引きだすような強烈な一体感は、当時のイタリア社会で「反ファシズム」が「支配

<sup>30</sup> *Il corriere della sera*, 1 luglio 1960.

<sup>31</sup> Ferraresi, *op. cit.*, p. 32.

的」であったとの、先にみたギンズバーグの指摘が、相応の根拠をとまなっていることを示す。

だが、ここで見過ごせないのは、先にみたように、当時の政治情勢では「レジスタンス」やそこでの諸派の協力はもはや過去のものとなり、東西冷戦を背景とする左右の対立こそがもっとも大きな位置を占めていたことである。加えて、当時の「イタリア社会運動」が、実際には——「正常化」路線のもと、4節で引用した当時の幹部の発言にみられるように——ファシズムの復興をめざすネオファシスト政党という性格を弱めつつあったことも忘れてはならない。これらのことはいずれも、ファシズムという立場の存在感を著しく低下させていた。そして重要なのは、そのことが、「反ファシズム」の存立をも揺るがすことにつながっていたことである。

戦後のイタリアでは、「レジスタンス」は「反ファシズム」を中核的理念とした現象として語られてきた。ここで再び、冒頭で引用したルツァットの「推論」を思い起こしたい。それは、「反ファシズム」という立場が、実はその敵であるファシズムの存在をかえって前提にしているのではないかという懐疑に根差していた。むしろ、ファシズムという敵を倒すことは、「レジスタンス」の共通目標であり、その達成なくしては、「反ファシズム」という立場が安定を得ることとはなかったであろう。しかし、その達成が同時に意味するのは敵の消滅であった。5節でみたように、「国民解放委員会」を構成した諸政党

が、ファシズムに対する勝利からそれほど時を経ないうちに対立関係に陥ったことは、敵の不在が「反ファシズム」にもたらした影響を端的に示している。またそれは、ファシズムに対する否定項として存立していた「反ファシズム」という立場を根本的に脅かすことにもなった。つまり、「反ファシズム」にとって、ファシズムという敵への勝利は、表裏一体の関係にある安定と不安定の2つの要素をもたらすものであった。

ファシズムの復興を当初掲げていた「イタリア社会運動」は、その点でたしかに「反ファシズム」の敵であった。しかしその敵としての存在感は総じて希薄で、同党は「反ファシズム」を真に脅かすような深刻な敵とはみなされていなかった。それは、同党が憲法の「反ファシズム条項」と抵触しかねない政党であるにもかかわらず、その存在が目立った政治上の争点とはならなかったこと、またファシスト党の再建禁止を具体化した、通称シェルバ法（1952年）の対象ともならなかったことに象徴される。また4節でみたように、「イタリア社会運動」自体も、「穏健派」指導部のもと、ネオファシスト政党としての性格を弱めていた。ファシズムのこうした存在感の低下は、「反ファシズム」の勝利をますます確かなものとしていた一方、ファシズムに反対する立場としての、その存在理由をも掘り崩しかねないものだった。

そのようななかであって、「イタリア社会運

動」のジェノヴァ党大会は、タンブローニ政権発足のいきさつとも相まって、ファシストを再び実体を伴う存在として登場させる出来事だった。「イタリア社会運動」の実態は、上にみてきたように、強烈なファシスト政党とは言い難いものであった。しかし、ファシストと目される存在が眼前にあらわれたこの時、「反ファシズム」は、それを積極的にファシストと名指し、これに抗議するということを通して、自らの存在を確認することが可能になったといえる。ここに「レジスタンスから生まれた共和国」という自画像の内的分裂という問題は後景に退き、そうした像が戦後イタリアの自画像であることを再確認する地平が開かれた。先に触れたナッタ議員の発言に対する、下院の一致団結した反応は、そのことがもたらした強い一体感と、それに伴う高揚感を、如実に物語るものといえよう。

このように考えるならば、ファシズムは、「反ファシズム」の敵でありながらも、その対立項として存在することで、「反ファシズム」の存立に寄与していたことが浮かび上がってこよう。つまり、イタリアに「反ファシズム」が根づいていると語り、「レジスタンスから生まれた共和国」という自画像の確かさを強調することは、そうした自画像をめぐる実態を反映した語りであっただけではなく、そうした自画像を根づかせる働きを担っていた。すなわち、ジェノヴァでの騒乱は、イタリア社会で「反ファシズム」

が規範的価値としてあることの証左であると同時に、その存在をより確たるものとする側面をももっていた。その点で、戦後のイタリアは、ファシズムを敵として否定しながらも、その敵によって自らの存立を支えられるという相反的な立場に立っていたといえる。

こうした戦後イタリアの相反的な立場は、「レジスタンスから生まれた共和国」という像が自画像であり続けてきたことにも、その一端があらわれている。それは、戦後イタリアが、基本的には「レジスタンス」という過去の記憶のなかにしか、(ファシズムという敵を現実目の前にした状態での)「反ファシズム」の経験をもたなかったことの、ひとつのあらわれでもあるからである。現実的な「反ファシズム」の経験を過去にしかもたないことで、「反ファシズム」をめぐる戦後イタリアの相反的な立場は、さらに困難なものとならざるを得ない。そうしたなかで、ジェノヴァでの騒乱は、敵としての「ファシスト」が可視化された点で、きわめて例外的な出来事であった。

戦後イタリアの「レジスタンスから生まれた共和国」という自画像、またそれを支える「反ファシズム」という理念は、このような不安定さのうえにあった。しかしその一方、ジェノヴァでの騒乱を通して再確認された、「レジスタンスから生まれた共和国」という自画像は、その後のキリスト教民主党の方向性を決定づけた。1950年代半ば以降、キリスト教民主党は、「社

会・経済状況の変化に直面して機能不全に陥り」、「左右のどちらに門戸を開くのか、左右両翼のどちらの政党を含む新しい連合をつくるのか不確か」な状況となっていた<sup>32</sup>。それに対し、ジェノヴァでの騒乱は、右派との接近を不可能なものとしたという点で、同党に左派との連携の模索という決定的な方向づけを与えた。それはやがて、1963年10月の、社会党を含む本格的な中道左派政権の発足に結実することになる<sup>33</sup>。こうした一連の出来事は、「レジスタンスから生まれた共和国」という自画像が、「反ファシズム」に関わる二重の困難と、それに伴う不安定さをはらみながらもなお、戦後のイタリアを規定していたことを示すものといえよう。

(しんせんじ ゆき・和洋女子大学)

<sup>32</sup> Ferraresi, *op. cit.*, p. 32.

<sup>33</sup> 社会党のネンニ(Pietro Nenni, 1891-1979)を副首相とした、モロ(Aldo Moro, 1916-1978)政権がそれである。キリスト教民主党は、モロが書記長をつとめていた1962年の党大会で、社会党との提携を視野に入れた中道左派路線へと転換していた。